単身赴任

山口 瞳

講談社

単身赴任
昭年五四年三月八日第一刷発行
昭和五四年四月二〇日第三刷発行
著者——山口瞳
© Hitomi Yamaguchi 1979, Printed in Japan

発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号一二三 電話東京〇三—九四五—一二一 振替東京八—三九三〇
印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社
定価——八八〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0093-139946-2253（0） （文1）

目次

単身赴任　7
三宅坂渋滞　31
靴と蒟蒻　55
木犀　77
時雨るゝや　103
恋愛論ふうに　129
ママ　161
南瓜　189
逃げの平賀　221
＊
あとがき　255

カバーの絵――著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

山口瞳作品集＊単身赴任

単身赴任

伊勢課長が大阪本社から赴任してきたのは、荻野が入社した一年後だった。

荻野はそのとき二十八歳で、途中入社だったから、営業第二課の平社員のなかでは最年長だった。だから、当然、荻野より齢は若いけれど、社歴の長い男がいる。従って、そういう男たちは、独身であっても荻野より多くの給料を貰っている。はじめ、荻野は、そのことに少しこだわっていた。給料の多寡ではなくて、自分が彼等の出世の妨げになっているような気がしていた。また、一緒に酒を飲みに行けば、荻野が支払わなければならない。

営業第二課には、五十一歳の万年係長の大河がいた。荻野は、そのことも少し厄介なものに感じていたが、入社一年後には、東京支店の幹部たちは、大河と荻野とをほぼ同格に扱ってくれるのがわかってきた。大河は、以前は精悍（せいかん）な社員であったらしいが、荻野が入社した頃には自分の将来の見極めをつけてしまったようで、荻野を競争相手として敵視するようなことはなかった。荻野は、まあまあ悪くない環境だと思っていた。

いまから思うと、そのころの荻野には、いくらかいじけているようなところがあった。会社が倒産して、親会社に引きとられることになったのだから無理もない状況だったとも言える。もし

かしたら、社員のあいだには、子会社から引き抜かれた切れ者という警戒心があったかもしれない。荻野は、当分のあいだは、年齢とか給料のことは忘れてしまって、新入社員のつもりでいようと思っていた。しかし、一年経ったとき、荻野は、すっかり会社にも同僚にも馴染んでいた。

前の課長が、異動になって、こんどは伊勢課長が赴任してくると会議の席で発表したとき、大河が、ああという声をあげた。それは溜息のようにも歎声のようにも聞こえた。

自然に皆が大河を見た。笑いだす男もいた。

「あああ……」と、大河は、わざとらしく、もう一度言った。「すみません。朝から胃の具合がわるくて」

大河はそんなふうにごまかしたが、誰も彼を相手にしなかった。課長もそれを問いつめたりしないで、次の議題に移った。

伊勢の評判はよくなかった。あいつは鬼だと言う男もいたし、陰では伊勢課長というよりも伊勢乞食と呼ぶ者のほうが多かった。

課長が異動のことを言った日に、珍しく大河が荻野を酒場に誘った。それは、会社の近くにある縄暖簾のオデン屋だった。

荻野には、大河が伊勢のことを話したがっていることがわかっていた。しかし、それを荻野のほうから聞きだす形にするのは危険だった。大河は、だまって酒を飲んでいる。彼は、一杯のコップ酒を飲み終ったときには真赫な顔になっていた。荻野は、大河が出世をしないのは、こう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

いう性癖が嫌われているためではないかと思った。

荻野は、仕方なくて、一時間ちかく経ったときに、伊勢課長とは親しかったのですかと訊いてみた。大河は三年前までは大阪本社にいたのである。

「ええまあ、それは……」

大河は、何か軽蔑するような顔つきになった。赤黒い顔に敵意がむきだしになり、その顔を荻野は醜いと思った。一刻も早く別れたいと思った。

「まあ、しかし、あんた、こういうところで仕事の話をするのはやめようじゃありませんか」

大河は泣いているような顔で笑った。それは、つくり笑いだった。仕事の話をするのでなければ、もっとマシなところへ誘ってくれたらいいと思った。

その店を出てから、東京駅まで歩いてゆくときに、大河は、ちいさい声で、こんなことを言った。

「伊勢さんは、社長の次男とは大学の同級生です。それから、彼の細君は、会長の遠縁にあたる人です。ですから、あんた、気イつけたほうがいいですよ」

それまでの課長は、毒にも薬にもならない男だった。会社員ずれをしていて、格別の野心はないようだった。だから、一応の癖をのみこんでしまってからは、荻野としては気は楽だった。

サラリーマンとしての最大の不幸は、自分の嫌いな上司につかえることだということを誰かが言っていた。異動の少い市役所などでは、そんなこともあるだろうと思っていたが、荻野はちょ

っと暗い気持になった。

伊勢の歓迎会は、寿司屋の二階の小間で行われた。荻野が幹事だった。その店は、会社から歩いて行かれる距離にあり、東京では名の通った寿司屋だった。若主人は、荻野の大学時代の卓球部の後輩で、いつでも特別の便宜をはかってくれる。

伊勢の挨拶は、東京のことはまるでわからないのでよろしく頼むということで終始したが、案外に剽軽なところがあった。笑顔に愛嬌があった。それもつくり笑いなのだけれど、前の課長や大河とは違って明るい感じがあった。伊勢は、自分からすすんで「枯れすすき」を歌った。荻野は、なぜだかわからないが、この人には素質があると思った。

荻野のこれまでの経験では、上司の歓迎会があるときは、二次会は上司がもつのが普通である。または、幹事に幾らかを渡して、これで皆で飲んでくれと言ったりする。伊勢はそんなことをしなかった。まだ飲みたりないような顔をしていたが、その日は、それで何となく解散になった。

その翌日、荻野が会社へ行くと、伊勢は、もう課長の椅子に坐っていた。荻野は三十分前に出社することを心がけていたが、伊勢はそれより早くて、これは大変なことになったと思った。

「荻野くん……」

伊勢は昨晩とは別人のようなこわい顔で荻野を見た。

「はい……」

早くも何かの失策を見つけられたのかと思った。

「きのうの宴会のお勘定はいくら？」

「ああ、すみません。報告が遅れて」

そんなことは報告しないでもいいことだった。うかつに詫びてしまった自分に腹が立った。荻野は、寿司屋の領収証を伊勢の前に置いた。

「ああ、そう……」

伊勢は、そのことについては別に何も言わなかった。荻野は、刺身と握り寿司以外の酢のものと吸いものと煮ものはサービスになっているんですよと腹のなかで言っていた。もし、この値段通りだと思って利用されたら困ると思った。また、大阪人には東京の一流の寿司屋の値段などはわかるまいとも思った。

「で、会費は？」

伊勢の目つきが鋭くなっている。荻野は、男は幾ら、女は幾ら、大河さんは五百円増しと細かく報告した。後になってわかったのだけれど、伊勢は、記念品が出なかったのが不満だったのだ。彼は自分が幹事をやったときの例を話してくれたことがある。

伊勢は、すばやく計算をしたようだ。

「困るじゃないか」

「は……？」
「足を出したぶんは、どうするの」
「千五百円ですから、みんなでなんとかします」
実際は自分でかぶるつもりだった。
「ああ、そう……」
伊勢がはじめて笑った。
「こういうことも知っておかなくちゃいけないからね」
「それはそうです」
「幹事はね、はじめに金を店に渡しちゃうのよ。これでやってくれって……」
伊勢は、ふだんは大阪弁であるが、東京言葉を誇張して真似ることがあった。渡しちゃうのよもそれだった。

伊勢が赴任した二ヵ月後の日曜日に、会社に関係の深い大阪の財界人が急逝した。荻野は、それを偶然ラジオで聞いた。すぐに伊勢に連絡しなければならない。彼の住むアパートには呼出し電話があったが、荻野は直接行くことにした。伊勢は秘書課にいたことがあり、こういうときには重宝がられる男だということを知っていた。
上野駅にちかい伊勢のアパートはすぐにわかった。木造で、彼の部屋は六畳一間である。ここ

からなら、会社まで地下鉄一本で行かれる。国電でもいいし、バスも利用できる。荻野は、さすがだなと思った。

「まあ、あわてることはないですよ」

「でも、いらっしゃるんでしょう」

「明日の朝、一番列車で行きます」

伊勢は、荻野が来るまで習字をしていたらしい。真黒になった新聞紙と、まだ墨の残っている硯(すずり)があった。サラリーマンというのは、案外に筆を使う機会が多いのである。

「通信教育なんですよ。半紙にかいて送ってやるの。そうすると、添削されて戻ってくるんです、こんなふうに……」

伊勢が、赤のはいった半紙を見せてくれた。そこには、殿、様、前略、拝啓、御霊前といった文字が書かれていた。やはり荻野の思った通りだった。それも書道には違いなかったけれど。

「えらいなあ」

「わたしは、朝六時に起きて、三十分稽古するんですよ。それから会社へ行くんです。休みの日は、まあ、昼からね」

ますますエライと言いそうになって、やめた。何か伊勢の前に出ると圧倒されるような気がする。こうしてはいられないと思う。伊勢は、この日の射さない暗い六畳間で、休日も習字の稽古をしているのである。

荻野は、あたりを見廻した。見覚えのある背広が、きちんとハンガーに吊るさがっている。

書棚にある書物は、すべて、ビジネス関係の入門書ばかりだった。それが三十冊もならんでいる。「経営学入門」「ビジネスマンの交際術」「セールスの心得」。それを見ていて、荻野は少し気持が悪くなってきた。伊勢に大学の時の専攻は何かと訊いてみたいような気がした。何か根本的な間違いがあるように感じた。

「ゆっくりしていきなさいよ。ああそうだ。腹がすいたな」

そう言われて、お茶も出ていないことに気づいた。

「ここは便利なのよ。なんでも取れるの」

伊勢が笑って立ちあがり、寿司屋とソバ屋とラーメン屋のメニューを持ってきた。

「電話を掛けてきましょうか」

「いやあ、お客さまにそんなことはさせませんよ。わたしが行きます」

「悪いなあ」

結局、九時ちかくまで、そこにいることになった。

「うちにだってラジオがあるんだから」

それは、アメリカ製の、当時としては高価なものだった。

「転勤になるとき、社長が呉れたんです。伊勢くんは、飲みに行ったり映画を見に行ったりしないだろうからって。馬鹿にしてるじゃないの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com